

# 大地

7号  
56.4.20  
浄土真宗大谷派  
浄園寺  
(23)5724

世は定めなきこそ

富岡 内山 康子

専門学校へ入学したばかりの頃の思い出。

徒然草の授業の時、「あだし野の露消ゆることなく鳥辺山の煙立ち去らでのみ住みはつる習ならばいかにものあわれも無からん。世は定めなきこそいみじけれ。」の名文の所。指名された生徒が口語に釈し、「この世は無常である事がすばらしい。」と言った。担任のY先生が「なぜですか、貴女自身親しい人が亡くなったりするのはすばらしいですか」。生意気盛りの生徒もさすがに黙る。「これは少くも四十才を過ぎた人でなければわからない筈。知的に言葉だけを口語に直しても解ったとは言えませんが」。深い意味を考えよと

いうわけだが、私は内心反撥した。では徒然草全文が我々若い者にわかる筈がない。先生だってお年かからしてやっぱり知的解釈にすぎないのではなからうかと。しかしこの一文は、その後私の心の底に沈み、何かある毎に常に浮んで来た。

あれから四十年余り。私も六十才を過ぎた今、あのY先生の訃報を聞いた。頭が良すぎて冷く、生徒や同僚の先生からも敬遠されて居た程の先生が晩年ひどくボケてみじめな死であったと友人の報に呆然とした。「枕の草子」等の研究で知られ、大学教授として活躍された先生の中年はすばらしかったろう。しかしやはり人間であった。早川一光氏が言う「ボケに生まれ冴えに冴えてボケに終る」。まさにその通りの一生である。人間の哀しさをつくづく思う。「世は定めなきこそいみじけれ」。先生御自身本当に理解されたであろうか。不肖な生徒はやっと解りかけたばかりである。

註 富岡の内山雅俊氏妻女、聞法求道の念あつて、大字の廻談、お講はもとより寺の盆、正月、報恩講等かならず参詣される。深い思索にたつて書かれたこの文、何とぞくりかえしくりかえし味読下さい。

## 病床雑詠

国賀 饒村 祐一

○ 生かされて 活くる

我なり あなかしこ

勿体なしや ただありがたし

○ 若き日に極楽寺（印度）に

見たる花

ありありとみる 朝夢の中

○ 時と所 永遠は今

只今の一点

夢の中では 一点なるか

○ 夢と現実 一如なりけり

あなかしこ

生きてきたるかぼけてきたるか

○ ともかくも 長寿万才

おめでとう

八十一才に 我はなりたり

註 国賀に生れ、医博、夫人と共に歌

歴六十余年、すでに歌集も出版されて

いる。近年健康をそこなわれ、ふもと病

院に入院中、篤信の人にて車椅子

にのりよく参詣される。

慎子さんに、松本樞丸師からの、今年の賀状を見せて貰った。清香な雪椿の図の上に、一点一点もゆるがせにせぬ楷書で「今いる処にしっかりといるのが一番いいのだ」天平の文字が毛筆で書かれていた。これこそ自己に目覚めた人、独尊子の境でありましょう。有難いお言葉ですね。去る十一月二十日の朝、宗教の時間に、テレビ放送された時の、松本師のお言葉も、やさしくユーモラスの中に感銘深かった。小松教区の、山腰ハナ婆さん(妙好人)との対談で同朋新聞編集の亀井金蔵師の司会だった。農家の人で、何の学歴もない人だが、さすがに山腰婆さんの話は、確固たる信仰をもつ人として、力強かった。その時の松本師のお話の一節を書いて見ましよう。

末子の男の子を幼稚園に通園させている若いお母さんとの問答、母「ね、O君、幼稚園で一番仲よいいのは誰、一番よく遊ぶのは」子「そうね、O君、Y君、まだいる、M君、N君」

今いる処にしっかりと

山 崎 武 雄

母「あら、N君とはこの間けんかをしたと言うじやない」子「あ、したよ、でもすぐ仲直りをして又好きになっちゃった、あ、又 Kさんも好きだよ」母「女の子じゃないの」子「あ、男の子も、女の子も一番好きな子沢山いるよ」母「親が一番好きな子、男にも女にも沢山いると言う無邪気と言うか、天衣無縫な言葉にじっと考え

させられる。続いての問答 母「ね、O君、家では誰が一番好き」いつも叱ってばかりいるのでどんな答がかえって来るか、びくびくし乍ら 子「そうね、一番好きなのは、お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お姉ちゃん、ああそれからお兄ちゃん」母「親、今やいろいろ考えさせられ声なし。母親は我執にとらわれ

わがはからい、差別動乱の世界、人の好き嫌いさへ、一番、二番と評価した境地に立つ。子供は無我一如平等、一にして二、二にして一、一番みんな好きと言う仏心の境に立っているではありせんか次に同じ日に聞いたもう一つのお話。子供を休日なので、親類に遊びにやった。併し今頃何をしてるか、不安と淋しさの余り、電話をかけてみる。

母「モシモシ、Yさんのお宅ですか。私ですが家のO君を、一寸電話口に出して下さい」子供が呼ばれて、お母さんからの電話と聞いて出て来る。子「モシモシ、お母さん、ぼくOだよ」母「あ、O君、今何している」子「あら、今、今電話かけているよ」母親びくくり、あまりの答えに言葉もなし、やがて氣をしずめ、母「モシモシ電話口出る前何してた」子「そうね。テレビを見たり、相撲をとったり、とても楽しいよ。一見子供は動いて居る様で、その処にしっかりと立脚して居る。母親は落ち付いて居る様で、動乱

詩

春の日に

山崎慎子

布団を干した日は  
 太陽を抱いて眠ります  
 ひなたくさい匂いは  
 私を幼い日の想いにさそい  
 そのまゝ眠りへといざないます  
 ほどよくふくらんだ綿の感触の中に  
 手足をうんと伸して  
 体をほぐし心をはぐし  
 全てを優しさの中に解き放ちます  
 布団を干した日は  
 太陽に包まれて眠ります  
 長いながい冬の日に  
 雪国を忘れて  
 何処へか旅して  
 小鳥たちを連れ  
 暖かな陽ざしと  
 ようやく雪国にも  
 朝日の顔をうかがい  
 はるかな山の稜線が  
 今日一日の日本晴を  
 約束してくることを確かめて  
 屋根の海を広げます  
 布団の海を広げます  
 冬の日は  
 あげおろすさえ  
 この春の陽ざしに  
 どれもおろすさえ  
 歌さえ口が  
 一枚々々広げます  
 布団を干した日は  
 太陽と一緒に眠ります

あとがき

「大地」の編集をしている  
 耳に観極会の放送が、春風に  
 乗って聞こえて来ます。雪に  
 いためつけられ、餌を求めて  
 里に下りて来たウソに花の芽  
 をすっかり喰い尽されて、今  
 年は桜がまるっきり咲きませ  
 んでした。用事で公園のそばを、  
 また青田川の近所を通る度に、ち  
 らともほらとも咲かぬ桜の木に、  
 腹立だしさとも、悲しみともつか  
 ぬ思いにとらわれてしまします。

そういえばこの何年か、大賀博  
 士によって東洋一と折紙をつくら  
 れたお堀の蓮も、すっかりそのい  
 きおいを失っています。

春になれば桜が、夏になれば蓮  
 が、それぞれの花の色と香りと姿  
 を、安らぎと共に運んでくれるの  
 は当然の天が与えたもうた自然の  
 恵み、と思っていたのは、人間の  
 勝手な思いあがりだったようです。

自然の摂理が、一体私達に何を  
 訴えようとしているかを、謙虚に  
 見つめたいと思います。(慎)